

特別編

深川ゆかりの人物たち

江東区深川江戸資料館

当館の常設展示室入口にある導入展示室では、再現した江戸時代後期天保年間（1830～1844）とほぼ同時代に深川で活躍した代表的なゆかりの人物たち8人を紹介しています。今号はこの8人の足跡を中心に、同時代を生きた人々と、そのつながりを見ていきます。

1. 開国前夜 領域へのまなざし ～松平定信と伊能忠敬～

(1) 寛政の改革推進者 松平定信

老中・松平定信（宝暦8年〈1758〉～文政12年〈1829〉）は、八代将軍徳川吉宗の孫として生まれ、陸奥国白河藩（福島県）松平定邦の養子となりました。定信が白河藩主であったことから、菩提寺の霊巖寺（白河1-3）周辺の町名が昭和7年（1932）「白河」となりました。定信は吉宗の享保の改革を模範として、寛政の改革を主導し、緊縮財政や出版物をはじめとした風俗規制を図りました。天明7年（1787）定信が老中となる前年、ロシアの軍艦が択捉島に侵攻。その後、蝦夷（北海道）方面にも度々出沒し、幕府は日本沿岸の海防整備を進め、定信も尽力しました。

(2) 日本初の実測地図制作 伊能忠敬

佐原（千葉県）で酒造業、水運業などを営む大商人であった伊能忠敬（延享2年〈1745〉～文政元年〈1818〉）は49歳で隠居後、天文・暦学を志し、江戸に出ました。幕府の天文方であった19歳年下の高橋至時（よしとき）入門。忠敬50歳、新たな大きな一歩を踏み出しました。忠敬は深川黒江町（門前仲町1-18）の自宅から、浅草にあった幕府の暦局まで通いました。忠敬は深川で地球の大きさを測ろうと思いつき、自宅から浅草までを測量しましたが場所が近すぎて誤差が出、長距離を測るために蝦夷地の測量が計画されたと言われます。寛政12年（1800）第一次測量出発時に忠敬は富岡八幡宮に参拝。その後、第十次にまで及ぶ全国測量の際は必ず富岡八幡宮への祈願を欠かしませんでした。第四次測量までは忠敬の個人事業であった日本沿岸の測量でしたが、その詳細な地図の正確さから幕府の海防防備政策の一環として取り上げられ、第四次測量以降、幕府の直轄事業となりました。その結果、忠敬の死後、文政4年



伊能測量200年記念 伊能忠敬像（富岡八幡宮）

（1821）「大日本沿海輿地全図」（伊能図）として完成し、幕末から明治にかけての海防の重要な資料となりました。

また幕命により樺太を探検した間宮林蔵（安永9年〈1780〉～天保15年〈1844〉）は、忠敬から天文測量術を学びました。忠敬は林蔵の才能を高く評価し、深川黒江町の自宅で全国沿岸調査をまとめる多忙な合間を縫いながら林蔵を指導しました。林蔵は弘化元年（1844）深川蛤町（門前仲町1）の自宅で死去し、本立院（平野2-7）に眠ります。

なお定信が致仕（隠居）後、洲崎の海岸沿いの土地に購入した松平家の抱屋敷である深川海荘は、嘉永6年（1853）ペリー来航後、江戸防備第一戦の舞台となりました。

2. 日本を守る 武芸と砲術 ～佐久間象山と伊東甲子太郎～

(1) 塾から多くの人材を輩出 佐久間象山

諸外国に対しての軍事力の強化を図るため、西洋流砲術は急速に広まりました。信州松代藩士の家に生まれた佐久間象山（文化8年〈1811〉～元治元年〈1864〉）は、嘉永3年（1850）7月から12月までの半年間、深川の真田藩下屋敷に砲術塾（永代1-14）を開きました。象山の門人には、吉田松陰、坂本龍馬、橋本左内、勝海舟をはじめとして、近代日本の礎を築いた多くの人々がいます。象山が西洋砲術の道に進むきっかけは、深川で医学塾日新館を開いていた坪井信道（寛政7年〈1795〉～嘉永元年〈1848〉）がオランダ語の砲術書を象山に紹介した事と言われます。また象山は海舟の妹、順と結婚しました。

(2) 深川の道場主から新選組幹部へ 伊東甲子太郎

象山がいた深川の真田藩下屋敷に隣接した北側には新選組の参謀となった伊東甲子太郎（天保6年〈1835〉～慶応3年〈1867〉）の北辰一刀流伊東道場がありました。常陸国志筑（かすみがうら市）に生まれた甲子太郎は、深川佐賀町の伊東精一道場に入門。その後、精一の養子となり道場を継ぎました。甲子太郎は新選組入隊後、近藤勇らとの意見が対立し離脱。慶応3年（1867）近藤勇たちの策略により、京都で暗殺されました。

また新選組の近藤勇、土方歳三、沖田総司が学んだ天然理心流の創始者である近藤長裕は妙久寺（北砂2-2）に眠ります。近藤勇は流派四代目です。

3. 江戸庶民文学の先導

～山東京伝と滝沢馬琴～

(1) 木場生まれの戯作者 山東京伝

文化の発信地だった上方の文芸とは別の流れで江戸時代後期には江戸の発展の中で、固有の文学が誕生しました。それらの談義本、洒落本、黄表紙、読本、滑稽本、人情本などをまとめて「戯作」と言います。

当時の遊郭をテーマにした洒落本の全盛期を作り上げた山東京伝（宝暦11年〈1761〉～文化13年〈1816〉）は、木場（木場4、5付近）の質屋に生まれました。江戸の三大遊郭である吉原・品川・深川の遊女上りの女性三人が、それぞれの特色を語る「古契三娼」（天明7年〈1787〉）などを著しました。京伝は浮世絵も学び、北尾政演と号し、挿絵も自ら手掛けました。その後京伝は寛政2年（1790）、定信の寛政の改革時に出版統制のあおりを受け、手鎖50日刑に処せられました。



「古契三娼」
天明7年（1787）刊
山東京伝著・画
大東急記念文庫蔵

(2) 「南総里見八犬伝」の滝沢馬琴

軟派文学の京伝に対し、歴史物などの硬派文学を代表する滝沢馬琴（明和4年〈1767〉～嘉永元年〈1848〉）は、24歳で京伝に弟子入りしました。馬琴は旗本・松平信成の用人の五男として、深川の松平邸（平野1-7、8付近）で生まれました。「南総里見八犬伝」は28年の歳月をかけて完成した読本の代表作です。

また、江戸庶民の暮らしを生き生きと江戸言葉で描いた「浮世風呂」、「浮世床」の式亭三馬（安永5

年〈1776〉～文政5年〈1822〉）は深川の雲光院（三好2-17）寺中長源寺に葬られ、墓は現在、正泉寺（目黒区）に移転しました。三馬は戯作者でもある平賀源内（享保13年〈1728〉～安永8年〈1779〉）の作品から多くの影響を受けました。源内は深川の自宅清澄1-2、3）でエレキテルの実験を行い、発明家、本草学者などの多彩な才能を発揮しました。

4. 深川を舞台にした歌舞伎

～四世鶴屋南北と七代目市川團十郎～

(1) 「東海道四谷怪談」 四世鶴屋南北

四世南北（宝暦5年〈1755〉～文政12年〈1829〉）は晩年にあたる文化8年（1811）以降、亀戸に住み、その後、深川の黒船稲荷（牡丹1-12-9）に移り、ここで没しました。南北は狂言作者として永年不遇でしたが、71歳で生み出したのが代表作「東海道四谷怪談」です。文政8年（1825）7月中村座初演。木場に住んだ七代目市川團十郎が伊右衛門、三代目尾上菊五郎のお岩など、当時を代表する役者が演じました。南北はこの狂言中で、特に重要な劇的な場面「砂村隠亡堀の場」、「深川三角屋敷の場」を自身が住んだ深川を舞台に描いています。

(2) 「歌舞伎十八番」を制定

「江戸の守護神」、「役者の氏神」と言われ江戸歌舞伎を代表する市川團十郎は四代目以降、木場に住み、深川は團十郎ゆかりの地です。四代目（正徳元年〈1711〉～安永7年〈1778〉）が深川島田町（現・木場2-11-13付近）の別荘に住んだのは明和2年（1765）以降と言われます。四代目は、「木場の親玉」として慕われ、役者を育てました。七代目（寛政3年〈1791〉～安政6年〈1859〉）は、江戸歌舞伎の爛熟期に活躍し、團十郎家の代表的な狂言を「歌舞伎十八番」として制定しました。また七代目が住んだ深川の自宅（木場2-11-13付近）は、天保の改革の儉約令に触れ、約7年間江戸十里四方の追放となりました。

このように深川には歴史に足跡を残した人物が生き、ゆかりの地です。このほかにも多くの歴史上の人物が深川を舞台に活躍しました。残された史跡などから、実際にその足跡に触れてください。

（主な参考文献）

『江東区史』江東区（1957）

特別企画展図録『江東幕末発見伝』

江東区深川江戸資料館（2000）

渡辺一郎『図説 伊能忠敬の地図をよむ』

（河出書房新社 / 2000）